

3章 昭和の詩人群

マルクス主義プロレタリア詩人にたいするアナキズム側の詩人は情感の豊かさにおいて凌駕するところがあつたというのがほぼ定まった批評のようであるが、それは政治と政党に従属せず、個人的自由発意と人間的情感を重んじたことで、当然アナキスト詩人の建前とするところであつた。

そのわれわれの詩人たちが輩出して活動を展開したのは大正十二年（一九三三）の『赤と黒』以後、昭和十年（一九三五）の『詩行動』の時期までの、ほぼ十二年間のことであつた。この間かなりの数に上る同人誌、機関紙の数々が出没した。

『赤と黒』『ダムダム』『文芸解放』『銅鑼』『学校』『詩戦行』『黒嵐時代』『黒い砂地』『バリケード』『一千年』『黒色戦線』『黒戦』『単騎』『アナキズム文学』『矛盾』『弾道』『北緯五十度』『壁』『先駆』『手旗』『農民小学校』『南方詩人』『冬、土』『豊橋文学』『詩行動』『文学通信』（傍点以外は詩同人誌）等々、仔細に回想するならばこの倍くらいもあつただらう。

詩人たちに変遷と移動はあつたが、たしかにアナキズム系なることを自認した者は、私の記憶の中だけでも次のように、驚くほど多かつた。

萩原恭次郎、岡本潤、小野十三郎、伊藤和、植村諦、草野心平、丹沢明、柴山群平、杉山市五

郎、坂本七郎、金井新作、碧静江、野村孝子、上野頼三郎、浅野紀美夫、手塚武、猪狩満直、更科源蔵、渡辺茂、竹内てるよ、神谷暢、草薙一郎、横地正次郎、岩瀬正雄、有島盛三、南小路薫、温井藤衛、小林定治、宮本武吉、木原実、砂丘浪三、坂本遼、斎藤峻、佐藤義雄、薄野寒雄、菊岡久利、浅弘見、伊藤耕人、秋田芝夫、定村比呂志、大杉幸吉、御手洗凡、土屋公平、赤石鋦、定村比呂志、局清、清水清、上村実ぎつとかぞえても五十人くらいは、四十年も距たった今でもすぐ思い出せる。これは何といつても盛況といわねばならない。その理由はどこにあったのか。私はそれについて二つ三つの理由に思いあたる。

その第一は『赤と黒』から出発した前衛詩人たち、萩原、岡本、小野らの詩人的活動がこの時期は、つらつとして注目されていたが、昭和二年に『文芸解放』に拠って若いアナキストたちの反ボルシェヴィキの文学運動が展開されたとき、この詩人達を中心となつて花々しく活動的であつたことの魅力がひろく影響したのではないかということ。第二は、政治的イデオロギーが強くて独特の反諷調の新しい語いばいの戦闘的なプロレタリア文学に自由主義詩人たちは馴染まず、その異和感のために、比較的ルーズに見えたアナ系に、いわゆる詩人的な氣質が集まりやすかつたということ、私のこの独断的な解釈はこれら詩人たちがアナキズムに深い造詣をもたなかつたということでもあり、だから、行きすぎてきこえるかもしれないが、その後多くのわが詩人たちは、あるいはヒューマニズムでしかない社会意識や、反都会の農本主義的な内部のおくれを、やがて、ファシズムから戦争へと日本の動向が大きく変転するときに、自己曝露した事実のなかに、私は

その確信をつよくするものである。

たとえばこのなかで有力な存在といえ、萩原、岡本らに続く詩人としては草野心平、竹内てるよ、菊岡久利の名が思い出されるが、ある時期以後これら詩人たちがヒューマニズムを語りつつ侵略的な民族主義に傾斜没入したことは、アナキズム陣営に属していたときの彼らが、国家権力を否定した詩人であつたなどということ、どこからも信じさせない。もし反ボルシェヴィキのためにアナキスト詩人を標榜したのであつたとすれば、労働者農民の側において階級的関心を自らによそおいつつ、まことは民族主義、伝統主義、大亜細亜主義等々の、その何れかへの反ヒューマンな追隨者でのみあつたのではないかとわがせるに十分である。アナキズムをいいながら農本主義的思考を明らかにし、やがて戦争のためにヒューマニズムを失つてしまった多くの農村詩人たちも含めて、かかる多勢のアナキズム詩人のなかに果してアナキスト詩人が幾人いたかという疑惑が、昭和の詩人群に投げかけられる。

丹沢明が、『文学通信』（解放文化連盟機関紙）に「アナキズム詩人論」を連載したのは昭和九年のことであつたが、彼はそのとき、小野十三郎、植村諦、伊藤和、萩原恭次郎、岡本潤、局清の六人を対象とした。いま思えばこれはかなりに妥当で慎重な選択であつたといえるようだ。この他に碧静江、坂本七郎、上村実、大杉幸吉、鈴木武らを加えれば、多勢といわれた昭和十年以前に活動したアナキズムの詩人は、ほぼつくさされているだらう。

だがこれらの詩人たちといえども、概してアナキズムのための詩、を書く傾向がつよかつた。

すなわち、アナキズムの文学、アナキズムの詩、なのである。もちろん、その同じ時期に成果を見せていたプロレタリア詩との対立抗争がいつも念頭にあって、相互扶助、反政治、反権力等々のアナキズム的相言葉が詩のテーマとなることも多かった。だが、ただ反政治・反政党を打出して、マルクス主義プロレタリア詩との質的な相違やまっぴら平等主義や自由気ままを謳歌するばかりではなかった。プロレタリア詩に比べて、自分について語ること、自主自律の結束を誇示すること、といった気風を失わなかった。もともと生活的で闘争的な百姓の詩を聞いた伊藤和など、農村生活者としての日常をうたうことに打込んだ農本主義詩人らが反都会の叫びを挙げる地点で、逆に都市も農村も、プロレタリアと百姓とが搾取されているのだという、階級的な現実把握をテーマとしていた。

アナキズム系詩人の雑誌としては小野十三郎・秋山清編集の『弾道』（昭和五年）が充実していたが、そこでは植村諦と草野心平との間で詩の技術についての論争がくりかえされた。魚屋の小僧にも食堂のおかみさんにもわからせるための詩の技術、という草野の発言を植村がとらえて、詩で語ったり教えたりする啓蒙のための詩、という建前に反対して、詩は革命のために革命をうたえ、そのため詩人は社会変革のため働くべし、といった。これはともに誤りを侵していた。詩人としての生き方も詩を書く理由もちがいがいながら、アナキストの詩をではなく、アナキズム運動のための詩を目ざして、二人はしきりと論争したのである。当時は無論本気な研究であったが、彼らの論点はアナキズムの（ための）文学、同じく詩、という考え方であって、これは政治（ある

いは反政治的政治）と詩の問題としてアナキストの文学として受入れ難いものであることは、前に説いたところである。草野心平は民衆啓蒙の役目を詩に負わせ、植村諦は詩人を詩を書くよりも革命家たれと主張したのである。

しかし昭和の詩人群の中でも、詩壇的野心のようなものない詩作者には、あまりこの弊はなかった。次に掲げる詩などは、政治的詩人のもものではあり得ないのだ。

チリ紙を小器用に弄び結び合せて
慥え上げた白薔薇の花。

鉄格子の中におち込まれて鬚だらけな囚人達の
優しい眸の上に

あゝ私はその埃っぽい天井に貼りつけてある
それを見たとき、

これは本物の花よりも美しいと思つた。

（囚人）

これは、けつして著名ではない詩人上村進の作品である。これこそ掛け引きのない抒情だ。組合専従者として働らき、留置場か未決監の、遮断された場で独りをたのしんでいる。彼は、条件の許す最高の喜びとなぐさめを、紙の花に見出して慰められているのだ。アナキストの詩人は、こういうものを自らもかき、仲間の詩として愛する。

そしてこの時期のすぐれた評論家丹沢明（青柳優）は、詩的表現について意味ふかい見解を發表した。昭和十年、といえればファシズムの嵐が強まり、満州事変、五・一五事件につづいて、第

二次大戦への突入が危惧されていたころのことだ。丹沢の主張は、アナキストの詩が自己を支えるために、如何に社会的現実を凝視せねばならないかを語ったのである。革命思想のため、アナキズム運動のためというのではなく、ぎりぎり、己が如何に生きるかという問題に触れて提出されたものであった。

「詩に於けるリアリティは何であるかといえ、詩方法による現実的現実の具象化ということに他ならない。」

「詩の構成要素として、彼の現実認識と方法技術とそれ等を貫く意欲とに分解することが出来る。個々の作品はこれ等の要素の統一体であると考えられる。」

「我国の詩人たちは、あまりに無意味に書き過ぎている。高い目的のための現実探求として詩を触手としている詩人が少い。彼等は単に感覚的に単に思いつきで詩を書いている。これは明らかに今日の詩人たちの自我分裂と意欲の衰弱の証左であろう。」

「詩も小説と同じく、客観認識の把握を出発としなくてはならないと僕は考えている。小説における真実——リアリティを、其処を出発して、しかも想像が現実をリードする所に在ると云い得るならば、詩における真実——リアリティは、同じく認識把握を出発として、しかも意欲が現実をリードするところに在ると云い得よう。」〔詩行動〕第三号「詩のリアリティについて」

丹沢明がこのような現実主義の主張を云い立てて、詩を自我的主観主義的な低調から引きずり出そうと試みたことは、マルクス主義プロレタリア詩にはあり得ないことであった。彼等は自己

の目で現実及び現実の変化と移動を見ようとする意志が弱く、公式主義の目でしか見ない指導に従って、安易にそれに凭れかかっていけば、どこからも非難などはなかったからである。

だがわれわれは、移ってゆく現実のなかで、現実を対象としながら主体的にその現実を詩として把握しなければならぬ。感傷や政治目的意識のファナチックな目ではない自分自身の目でとらえなければならぬ。丹沢明の持出した問題はそのことであった。彼はこのとき、昭和十年、メーデーはこの年を最後に禁じられ、アナキスト詩人群の活動が停止に至ろうとする直前に、直情径行な反抗の叫びを得意としてきたその詩人たちに向って、詩の認識と方法の転換を申出たのである。

「現実実践とは、詩人が現実認識を体験にまで高めてゆく態度である。詩人はペンと紙だけで詩を書くのではないという事は、彼が生活している社会的現実の中で諸々の事相、それ等の関連に対して積極的な追究精神を向け、したがって現実の日常性に於て、その歴史性を体現しゆくべきであるという意味に他ならない。」(同前)

ここにいわれていることは、従来考えられてきた詩の観念を破壊するかもしれないものである。つまり、書くばかりが能じゃない、現実をよく見ろ、気軽に詩が書けるほど甘くないぞ、と知っているのである。だから「現実認識主体の相違によって如何ようにも把握されるものである」といった言葉が、いっそう重く、詩人たちはそれによって能力をためられることとなる。そして彼はほとんど結論のように次の言葉を書いた。

「卒直に云って、現実を優位に置こうとするところに今日の詩の再認識、リアリズム詩の傾向がある。自我主義から現実主義への移動は、各種の時代的情況の変化を計量するとともに我々が何だかんだと言いながらも今までついに唯物論的立場に立ち得なかった過去への省察として大胆な打開がなされたのである。」(同前)

このように述べたところで、ひるがえって彼は主観主義的傾向の詩にさらに否定的態度を明らかにする。これはすでに出現しつつあったリアリズムの詩のための足固めをするかのようであった。

「いわゆる自我的主観主義的傾向の詩が企及する真実の質は個人的な心情の『切実さ』に結びつき、純潔性と高度な発光性を帯びている。強烈な独断と純粹さを持って、人々に大きな共感と、また他の人々には大きな反感を与える。詩はそれでいいのだという断定とともに、それに対する大きな不満を感じる。何故なら、かかる傾向の詩が一般に持つ真実なるものは、厳正な批判に耐え得る『真理性』に乏しいからである。」(同前)

あまりに長々しく引用した丹沢明の詩論は、ここではまだ最後の一線、彼が企図し、研究会などで語りつつあったところにまでも至らぬうちに、昭和のアナキズム系の最後の詩誌『詩行動』は廃刊となった。

すでに検閲は前にもましてきびしかった。詩をかいて発表するからには、なるべく検閲の目をかすめて生きのびなければならぬ、というのが、詩のリアリテイの追及について努力研鑽の論

文を連載した丹沢明の狙いであった。その狙いのために、長々とリアリズム論を展開したその意図は、一口にいえば「現実をして語らせる」ということに尽きる。

すでに第二次大戦の入口に立っていた昭和十年の時点で、国家権力反対、戦争反対、独占資本をつぶせ、プロレタリア万才、などと書けたものではない。プロレタリア詩とアナキズムの詩が反抗的にすすめてきた詩の言葉は、検閲に遭って潰される惧れのなかに置かれていた。

しかし、人民の生活苦の事実、兵隊にとられる国民、皆兵を回避したい感情等々は現実に存在している。ただそのことを言葉に書くこと、まして詩的抑揚の言葉で書くことは許されない。丹沢の意見は、その許されないことを、いわない云い方で語ろう、語り得るのだ、ということにあった。詩人の主観的叫びは駄目であろうとも、国民が苦しんでいる問題、あるいは明らかかな社会矛盾、深く見ることでその実体を語り得る現実、そういうものがある。それをアナキスト詩人の目がとらえ、ペンがその在る姿の如くに描くことができれば、描かれた現実が、語りかける、であるというのであった。

この丹沢の努力的なたたかひの姿勢は、論としてうなづけても実践はたやすいことではなかった。『詩行動』の終りごろ、この表現方法に沿いながら誰も容易にそれを成功し得なかったとき、ほとんどその出発の日から抒情詩人でなかった小野十三郎は見事に成功してみせた。小野の場合には丹沢の「リアリズム論」によっての試みではなく、逆に彼は詩集『古き世界の上』(昭和八年)以来、情景と人間を実践的に捉える方法の所有者であった。あるいは多分、丹沢は当時の小野十

三郎の詩から、現実をして語らせる、叫ばせる、というリアリズム論を展開したのであったかもしれない。明治の革命歌にも「石よ何故飛ばざるか、森も林も武装せよ」という言葉があった。まさにその心である。

小野十三郎が実践し、丹沢明が理論づけた詩法によってささやかな仕事を為したのは秋山清であった。彼が戦争詩を書かず時局に不同調的なくつかの詩を残し得たのは、戦時下のわが国に現在する事実、かくしようもない残酷、生きることの心許なさ、それらを抑揚のない姿ながら写実的手法で描いたからである。風景も語ることがあるのである。

そらの雲が

かたちをあんなに変えてゆく。

雲のないところは底のない青ぞら。

地上に風は吹いていない。

雲のかたちをいろいろとかえて

高いところは、風が吹いている。

そんな雲のことなど誰も見ていない。

風のことなど、誰もしらない。

(かぜ)

戦後になって出た詩集『白い花』のなかの誰も注目しない詩だが、そらの雲を語りながら心懐の不安と、誰も他人には注目しない、生活連帯のほとんど失せた戦時下の庶民の運命を思わせるというものは、リアリズムが写実に終らぬものであることを示している。

昭和のアナキスト詩人の、敗退しながらの歩みが、戦時下にまで、かかる姿で存在しつづけたことを、わずかに一つの慰めとしたい。

さて昭和戦前の詩人として語るべき人々の幾人かがいるなかでリアリズムの手法を生かした、都会と農村の二人の詩人を短かく紹介しよう。

小野十三郎は詩誌『赤と黒』同人の一人として出発した後、『文芸解放』の同人となり、昭和五年には殆んど独力で詩誌『弾道』を発行してマルクス主義的プロレタリア詩に対抗する仕事に専念した。昭和八年以降は大阪に帰ったが、解放文化連盟(昭和八年)に加わって指導的な論文をかき、写実から入って骨格のつよいリアリズム詩に独自の境地をひらいた。それらの作品をあつめた二つの詩集『古き世界の上に』と『大阪』とは、丹沢明が主唱した現実に語らせるという方法を、具体的に示すものであったが、小野のその追及が、むしろ丹沢の提唱以前からであった

ことは前に記した。詩から、いわゆる抒情を追放しようとすることには、被支配者としての日本民衆のなかに永年培かわれた諦感的な情緒の破壊という狙いがあった。その追及は、戦後になつて「短歌的抒情」の問題として注目された。したがって戦争中小野がいくらか戦争に協力したかに見える作品をかけたようであるとしても、彼の詩の方法は内側からひそかなレジスタンスを支えていたと考えられる。その詩の方法はそれに耐えるものをもつていた。

高村光太郎や草野心平のようなヒューマニズムの詩人と思われている人々がさかんに、日の丸や富士山にむすびつけて無双の国体を歌いあげるといふ錯誤をかさねているとき、小野はまったく質のちがった富士山を示している。

山がある。

それはやや富士に似ている。

あるいは富士そのものかもしれぬ。

含銅硫化鉄の大コニーデ。

夏日天を仰げば全山の岩肌黒光り。

はげしく水墨に抗して

靄を吐かず。

(山)

この詩は、懐古的でロマンチックな仰望において国民的象徴にまでなっていた富士の存在にはげしく抵抗している。戦後に出た彼の「詩論」としてひろく知られた短歌的抒情の否定も、その下地は遠く昭和四、五年ごろから発しているが、それが戦争中の彼自身の抵抗感によってある到達を示したことに注目したい。ダダの『赤と黒』から出てきた詩人のなかで、小野十三郎のみが情緒的な詩の境地を抜け出したのは、彼のアナキズムの質とかわるものがあるようだ。

およそ理性的現実的な一面と、その強靱不逞な短歌的抒情の否定という主張が語る奴隸的感性の拒否とは、アナキスト詩人として永年の反抗精神が、彼のなかに確固とした論理を構築していたことを示す以外のものではない。

小野はまったく腹が立つほど観念的にならない。せきこんだり怒鳴ったりしたことがない。思考する力につよく支えられているからである。プロレタリア詩の叫びや思い上りがなく、人間性の奥にしいたげられてひそんでいるべき野性に期待し、労働者農民が当然内蔵している反抗的な情感の発露を予想するものとして彼自身の詩論は樹立されている。小野が現代詩の根底に抒情を廃し批評に拠ろうとしたのもそのためである。このことをいい得た詩人は小野以前にはなかった。われわれの詩人たちの多くがマルクス主義詩人と対立するに当って、当面の現実的課題に即して詩を書くこととすることで人間的現実からやや遠ざかろうとすると、小野は働く人間の生活感動を重視し、しかもそのなかに奴隸的感情を腑分けしてそれを否定するところにポイントを置いたのである。これはいいかえれば、天皇制になれて生きて来たわれわれ自身の内部に対する反

省でもあった。

戦時中造船所に徴用されて、労働者のなかにはじめて起居した経験は、彼の「批評」の詩論にその主張をますます強からしめた。

昭和のはじめのわれわれの詩人群のなかで、小野十三郎だけが、叫ぶプロレタリアの詩をかかず、資本主義機構と大工業が急速に変えてゆく人間性とその生活環境を凝視し、その下におしこめられている、健康で近代的なるべきものの解放を目ざしたのは、意義ふかいことであった。小野が労働者であったら、このような方法はあるいは発見されなかったかもしれない。

「現実をして語らせる」という方法を私たちが当面の火の粉をくぐる実践的な方法としてとりあげたとき、小野はそこからもう一步も二歩も踏みこんだ。日本の文学のなかで彼が為したこの実践は、もつとひろくふかく掘下げられる必要のあるものだ。ただに短歌的抒情の問題としてのみ片づくことではない。

戦後、人民詩精神を提唱した『コスモス』は金子光晴、岡本潤、秋山清と小野十三郎によって出発して敗戦後の詩運動の最初存在となつたが、小野の詩と詩論の力はここでも大きかつたと記憶する。

現在彼がアナキズムを信条としているか否か、私にははっきりしないが、アナキズムの包懐なくして彼の詩論が今日の発展を見たか、それは疑問である。同時に昭和のアナキスト詩人群の活動のなかに小野が欠けていたら、その現代的性格はよほど割引されるものがあつたであろう。

五折

なお、解放文化連盟から出版された小野の『アナキズムと民衆の文学』(昭和八年)というパンフレットは当時もつともまとまつたアナキズム文学論として顧みるべき文献である。

戦後のアナキズム運動とのかかわりは切れているが、詩人としての活動力は持続充実している。明治三十六年大阪に生まれた。

伊藤和もまたリアリズムの詩人として注目に値したが、小野とはちがつてそのすべてが百姓であった。最初の詩集『泥』はガリ版で昭和五年に発行、そのなかに「コップ酒屋にいる男の群」「高神村事件のときの詩」のような力づよい農民詩をもっている。農村生活の中から生み出されてこれほど戦鬨的な百姓の詩をその後も見たことがない。

この詩が戦前の日本の国力がもつとも充実していたといわれる昭和初期の作品であることを知れば、その時代の下で百姓がどういう目にあつていたかを書いた伊藤の詩に、歴史的な意味のふかさを感じるだろう。

田村栄が、伊藤和と中心になつて出したガリ版雑誌『馬』に、神武天皇を征服者とする文章をかいて不敬罪に問われたのは昭和五年であった。(このとき入営中の田村は軍法会議で二ケ年、伊藤は二ケ年(執行猶予二年)の刑を受けた)伊藤和がさらにはげしい意欲に立つて百姓生活に取材した詩をかいたのは、この『馬』の事件からの出獄後であった。彼は『学校』『クロポトキ』を中心にした芸術の研究』『文学通信』『弾道』(第二次)『詩行動』に連続して力作を発表した。

「部落二百人」「冬ごもり日記」「米を売る話」「すいか」などの息長い作品が、今も記憶にのみがえって来る。

若い日からの農民運動の活動家として、また千葉県匝瑳郡の自作兼小作の立場から、米をつくり野菜をつくつて、売つて、生活するというのがどのように貧しくくるしいか、そこから資本主義国家の農民の生活を細叙し、かつその中に相互協力によって生きる人間性のうつくしさと意地きたなさも、彼は書いた。百姓生活の實際に即したために、プロレタリア詩人の観念的なイデオロギー露出の傾向とは全くちがった地方色のつよい農民の詩であつた。

伊藤和の詩は一地方の農村の生活感情を主としてかいたことで、都会生活を主に描いた小野の詩法とは甚だしく異つてみえる。しかし伊藤和は小野十三郎の方法に負うところが極めて大きい。それは彼が小野を詩の上の敵とするほどに、詩人的競争相手としていたことでも想像される。小野と伊藤とは昭和十年以前、われわれの主張したりアリズム詩に早く実を結ばせた二人の代表的な詩人であつた。

その詩作の目あては、はたらく人たちにも読ませたいという心組みであつたから伊藤の詩には、わかりよい日常のはなし言葉を積極的にとり入れる努力が払われていた。「すいか」という作品など、全部カナ書きで、朗読して誰にもすぐ耳からわかるものでありながら、百姓生活の辛苦とかなしさをうたい得た傑作である。

あせがながれる
かんかんてる

ガキらは どんなに たべたいであらう
しるのしたたる まっかなスイカにむしゃぶりついて
はらをてんでんたたくまで

はたけのなかに おおきくそだち
あっちに ごろり
こっちに ごろり
そのうえに つると はがかむさり
はなもたたくさんついている

そして かんかんでりますから
スイカはあかくいろづいたろう
ひとつ ひとつ ゆびでつついて

はやくまっかにならないか

ああ おおきくなつた はつなりとにばんなり

おおきい おおきい おつきさまのようだという

ガキらは よる そのゆめをみるだろう

そして

はたけのなかに はなとはなとむすばせながら

おおきい はつなりとにばんなり

おららとみんなと わけてたべたい

ガキらは

どこのガキもおなじことです

けれど かつてにたべてはならないど

かつてにたべてしまつてどうするか

おとなは ガキらを しからねばならない

ああ おとなは やつぱり かなしいだろう

おおきい はつなりとにばんなり

くるまにつんで とおくのまちへ

あせをながしてうりにゆく

(すいか)

その詩の主題が生活的且つ戰闘的であつたため、昭和十年の「無政府共産党事件」以後彼には発表する場所がなかった。そして戦争がひどくなつてゆく下で彼は最早書かなかつた。

抵抗の精神として写実する手法を身につけた詩人には、たとえ戦時中大本營発表の数々の大戦果についても、その確認したい勝利の報道、日毎に敗退の様相をあらわにしてゆく戦争の現実を前にして、一億一心最後の勝利を確信的なファナチックな樂觀を自分に許すことはでき難かつたであろう。伊藤和は自分の詩の凝視する手法が、荒廃一途の戦時下の詩作に適さぬことを知つて、俳句などつくつていたのであつたが、戦争敗北の昭和二十年はじめ、反戦の言辞を弄したという事で徴用先の銚子の木造船会社から、検挙されて終戦後まで留置されていた。

明治三十七年千葉県に生まれ、昭和四十年銚子市で死去した。生前昭和三五年に『伊藤和詩集』が出ている。